



ぼくらは深く、深く、  
もっと深く降りてゆかねばならない。

—ハーマン・メルヴィル

# Pola X

ポーラX

レオス・カラックスの新たな伝説

✂ 99年カンヌ国際映画祭コンペティション正式出品作品

監督=レオス・カラックス 原作=ハーマン・メルヴィル「ビエール」 音楽=スコット・ウォーカー  
出演=ギヨーム・ドバルデュール/カテリーナ・ゴルベワ/カトリーヌ・ドヌーヴ/デルフィース・シュイヨー  
提供=アミューズ+デジタル・メディア・ラボ+テレビ東京+電通+ユーロスペース(配給)

テレビ東京開局35周年記念作品 | Supported by TAKEO KIKUCHI

## 『ポヌフの恋人』から8年、レオス・カラックスの壮絶過激な衝撃作

華麗な映像と激越なドラマで多くのファンを心揺さぶった『ポヌフの恋人』から8年。レオス・カラックスが4年がかりの新作『ポーラ X』で復活した。現代フランス映画の“作家性”を鮮烈に示す衝撃作だ。

初の原作もの、しかも発表当時「狂気の書」とまで評されたハーマン・メルヴィルの問題作『ピエール』。虚飾の人生の中で真実を渴望する新進小説家ピエールが電撃的に出会う謎の黒髪女子イザベル。姉と弟かもしれない二人が愛の生贄ながら魂の暗闇を下降し、運命の奔流に溺れていく壮絶過激な純愛物語だ。

真実を求め絡み合う二人の激しく疾走する愛を、カラックスは今までにないスケールと強烈な闇のインパクト、そして洗練された映像でぐいぐい引き込み、描ききる。

冒頭のコラージュ映像から謎めいたクレーンショットへ。美しい母と婚約者、満ち足りた生活を全て捨て不安定な錯乱の世界へ突き進むピエール。神秘的な夜の告白。疾走し狂乱し旋回するオートバイ。闇の中の官能的ベッドシーン。炸裂するパーカッション。“血の河”に溺れる恐ろしい夢。

1カット1カットにこだわるカラックスならではの濃密でエモーショナルな映像と音。破壊へ向かう主人公を見つめる仮借ない視線は新たなカラックス伝説を生むだろう。

### メルヴィル文学を現代的に読み直し、

### 映画化に全身全霊を傾けた新たな金字塔

22才の初長篇『ボーイ・ミーツ・ガール』(83年)で早熟なデビュー。“フランス映画界の神童”“ゴダールの再来”と騒がれ、25才で『汚れた血』(86年)、30才で『ポヌフの恋人』(91年)と『アレックス青春3部作』を完成。そのつど注目と賛嘆、ときには“偶像破壊者”として悪意ある批判と、毀誉褒貶にさらされてきた若き巨匠カラックス。『アレックス3部作』後の新たな出発は、悪夢的に製作費が肥大した『ポヌフの恋人』の後遺症で製作者・出資者探しに手間どり、95年やっと日・仏・独・スイスの合作体制で製作スタート。製作中のコードネーム“Pola X”は原作の仏題(Pierre ou les ambiguities)の頭文字に解かれぬ謎のXをつけたものだが、そのまま公開題名となった。

『白鯨』で知られる文豪メルヴィルの150年前の小説『ピエール』をかねてから愛読してきたカラックスは、泥沼のユーゴ内戦など今世紀末の文脈でアクチュアルに、また自分自身の物語として現代的に読み直す。

この新たな金字塔にル・モンド紙は「死に物狂いで映画に全身全霊を傾け、新たな真実を探そうとこれほど深く映像と音の中に身を沈めた者が、今日の映画作家に一体何人いるだろうか」と称讃を惜しまない。

### ギヨーム&ゴルベワの迫真の演技。音楽は「Tilt」の鬼オスコット・ウォーカー

謎に包まれた複雑なカップルを激烈なエモーションで演じきったのは、美貌の

新星ギヨーム・ドバルデュ(ジェラルム・ドバルデュの息子)と「パリ、18区、夜。」のカテリーナ・ゴルベワ。母親役はカラックスの才能を高く評価するカリーヌ・ドヌーヴ、前半と後半で極端な変化をみせ入浴シーンや危険なバイクシーンも話題だ。可憐な婚約者を演じたデルフィヌ・シュイヨはまだ国立演劇学校の学生。

音楽は「Tilt」の鬼オスコット・ウォーカーが担当。60年代ウォーカー・ブラザーズでヒットを放った後メインストリームから姿を消し、80年代にその特異な低い声のカルトの音楽でアート派として再登場。カラックスの強い希望で劇中のテーマ曲を作曲した。

撮影は『そして僕は恋をする』等デプレッション作品のほか『イルマ・ヴェップ』『ティコ・ムーン』で注目のエリック・ゴータエ。前半を端正で重厚な35ミリ、夜の森やパリ以降をスーパー16と使いわけデジタル処理も加えて、主人公たちの生きる魂の彷徨を激しくも象徴的に表現した。

《なぜならば、激動の最果てに達すると、人間の魂は、溺れかけた人間そっくりだからだ。自分が危殆に瀕していることはよく分かっている。危殆の原因もよく分かっている。なのに、やはり海は海であり、溺れかけた人間は溺れるしかない。》

### ものがたり

ピエール・ヴァロンブルーズ(ギヨーム・ドバルデュ)と母マリー(カリーヌ・ドヌーヴ)は、森に囲まれたノルマンディの瀟洒な城館に暮らす。美貌、名誉、財産とすべてを手にする母マリー。彼はそんな母を“姉さん”と呼び、まるで恋人を慈むかのように愛撫する。夏の朝、ピエールは亡き父のオートバイで、婚約者のリュシー(デルフィヌ・シュイヨ)の家へと疾走する。二人は光そのものだった。

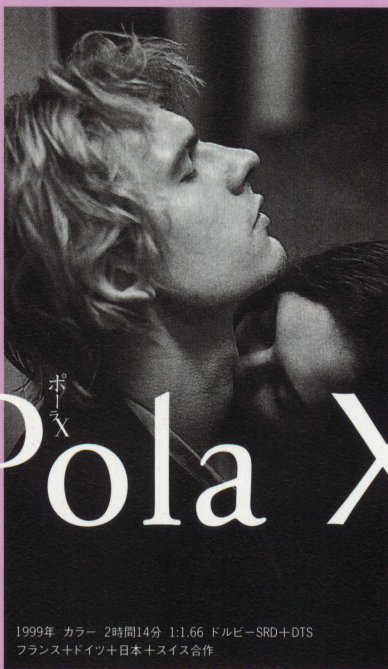
ピエールは、“アラジン”という名の覆面小説家である。ヴァロンブルーズ家のもう一人の末裔で、従兄ティボーがシカゴから戻ってきた。そんな二人の再会を盗み見る長い黒髪のジブ

シーの女(カテリーナ・ゴルベワ)。ピエールが振り向くと、女は闇へと逃げまどう。その影を追いかけるピエール。バイクは転倒し、ピエールも傷を負う。

ピエールの変化を感じとった母マリーは、リュシーとの結婚の日取りを早々に決める。リュシーに報告に走る途中の暗闇に、ピエールはあの顔を再び見る。「君は誰なんだ?」という問いに彼女の独白が始まる。「私はあなたの姉……」。ピエールは家を出る決心をする。

彼等は、バンド活動の傍ら武装訓練をする集団が潜伏する郊外の廃墟に落着く。姉と弟かもしれない二人は、やがて激しく愛し合う。ピエールは“最悪な本当の真実”の小説を書き続ける。そんな時、マリーの事故死と、リュシーの病気の知らせが届く。母マリーの葬儀を遠くから見守るピエール。

ある日、病身のリュシーがやって来る。イザベルにはリュシーのことは従妹と、そしてリュシーにはイザベルとの秘密は明かされぬまま三人の生活が始まる…。



## 今秋、待望のロードショー!

### 特別鑑賞券1500円絶賛発売中!

当日一般1800円/学生1500円/シニア・高校生1000円(都内プレイガイド、チケットぴあ、チケット・セゾン)

★シネマライズおよびユーロスペース劇場窓口にてお買い求めの方には、フランス版オリジナル特報・予告編・カンヌ映画祭記者会見収録の特製ビデオをプレゼント(3000本限定/先着順)

●「Pola X」ホームページ <http://www.polaxjp.com>

## シネマライズ

Tel. 3464-0051 渋谷・公園通りバルコ・パート3前  
上映時間 連日 11:30 2:10 4:50 7:30